

【解説】 戦争責任への誠実と苦悩と

新船海二郎

火野葦平は「戦犯作家」といわれた。正確には、本書収載の「追放者」にもあるように、いわゆる「公職追放」を受けた七人の一人で、「日華事変以来、同人は戦争に取材せる多数の著述を発表し、世に迎えられたるものであるが、その著作に於て、概ねヒューマニズムの態度を離れなかつたとは云え、『陸軍』『兵隊の地図』『敵将軍』『ヘイタイノウタ』等に於ては、日本民族の優越感を強調し、戦争、特に太平洋戦争を是認し、戦意の昂揚に努めて居り、その影響力は広汎且つ多大であった。以上の理由により、同人は軍国主義に迎合して、その宣伝に協力した者と認めざるを得ない」というのが勅令の言い分だった。（追放指定を受けたのは他に、尾崎士郎、丹羽文雄、上田広、石川達三、林房雄、岩田豊雄＝獅子文六）

本書でこれを目にされたなかには怪訝な思いをされた方もおられるだろうが、事実である。火野葦平といえは、「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」の兵隊三部作だが、それらは追放理由の作品に挙げられていない。挙げられたものにしても、たとえば「陸軍」は木下惠介が陸軍省の依頼で映画化しているが、プロパガンダにならず、情報局から生まれて戦争が終わるまで映画製作の仕事がなかったといわれる。とくに最終の、入営する息子を行進する軍列にならんで小走りに捜す母親を

映し出す場面は、子を思う母の真情を語りこそすれとても戦意高揚とはならないものだ。反戦とまではいえないが、しみじみ観客の胸を打つ。映画と原作は別のものとはいえ、木下恵介をしてそのように撮りたいと思わせるものが原作にはあったといっている。戦意高揚と銃後の構えを説くだけの小説だったらこうはならなかったにちがいない。

追放理由の「その著作に於て、概ねヒューマニズムの態度を離れなかつたとは云え」という前段の言葉は、挙げられた作品にも流れており、そしてそのことが葦平の戦争責任についての自責を混沌と苦悩、苦吟のど壺に落とし込むことになったと私は思う。たとえば、「麦と兵隊」でも、日本兵の辛苦と敢闘精神をえがく一方では、中国の農民たちの悲嘆もまた目に留めずにはおれない葦平である。剛直な風貌には似合わぬやさしさを隠せぬのだった。

天皇への敬愛と「祖国の行く道を祖国とともに行く兵隊の精神」（「麦と兵隊」）を賞賛した葦平は、戦争末期にそれを思い返して、「これはまちがっていたであろうか」と自問自答する（「革命前後」）。そして戦後、みずからを、「鈍重で、暗愚ではあるが、／真摯で、傲岸で、怠惰な／一匹の河童」（「伝説」）と自嘲し、「ただ、自分の暗愚へ唾し、ひたすら謹慎することばかりを考え」、「暗愚の手記」を綴った（「追放者」）。

高村光太郎に『暗愚小伝』がある。私は、十分であるかどうかは別として、戦争責任に真摯に向き合おうとした作家、文学者は高村光太郎と火野葦平をのぞいていないと思っているが、その二人が口を合わせるようにみずからを「暗愚」としているのもふしぎな合致と思う。もちろん、「暗愚」のひとつで片づく話ではない。

小田切秀雄が「文学における戦争責任の追及」（『新日本文学』一九四六・六）で、「文学における戦

争責任者」としてあげた二五人（菊池寛、久米正雄、中村武羅夫、高村光太郎、野口米次郎、西条八十、斎藤瀏、斎藤茂吉、岩田豊雄、火野葦平、横光利一、河上徹太郎、小林秀雄、亀井勝一郎、保田与重郎、林房雄、浅野晃、中河与一、尾崎士郎、佐藤春夫、武者小路実篤、戸川貞雄、吉川英治、藤田徳太郎、山田孝雄。なぜか女性作家は一人もいない）をみても、戦時中の発言を戦後、文献から削除した者はいても、だれ一人筆を折ってはいない。挙げられた一人、詩人の西条八十が、なぜ軍歌をつくったのかと長男の八束に問われて、「馬のシヨンベン渡し船だからなア」と答えたのは有名な話である。馬もいっしょの渡し船では、馬の小便のしづきがかかるのも仕方がない、みんなそうだったというのである。それでもわが身をふり返って追及は必至と覚悟し、服毒用に青酸カリをポケットに忍ばせて日を送ったというが、四八年の公職追放に入っていないと分かると、翌年には、「古じ上着よさようなら、さみしい夢よさようなら」（「青い山脈」）と、ひらりと着替えてみせた。西条八十に反省がなかったとは思わないが、それほど深刻なものでなかったとはいえるだろう。

しかし、光太郎と葦平は違った。太平洋戦争の開戦に、一方の手で、「この日世界の歴史あらたまる」、東アジアが西洋の支配から解放される^たときが来た、と詩った光太郎は、なぜかもう一方の彫刻の手は動かさず、父光雲の作に、国の注文をこなしたそれは彫刻であるかと問いつづけた。戦後は、疎開した花巻の小屋を離れず、おのれの愚かさ^と向き合い、自分をそのように動かしたものが何であつたかを懸命に探った。戦後はじめて、そして最後になった彫刻は十和田湖畔の乙女の象だが、光太郎は、未經験の最大の裸婦立像に^いどんだ。「暗愚」な人間とそれを写す「人間の理性」をつねに「影と形」として向き合^つつように、乙女の象を対に置き、あの日^をを繰り返さぬ意志を込めた。

葦平は逃げた。

「私は、私というものにくっついていられるもつとも凡庸なもの、平俗で、面倒で、煩わしいもの、しかし、それこそが私の命であるもの——父と、母と、妻と、七人の子と、家族と家庭というものなつかしさに、みずからの恥をつつむ悪辣狡猾の決意ができたのであった。(…略…) 私を鋭いまなざしで、批判したり、追放したりしないのは、家庭だけであった。卑怯者でいよう。家庭のなかへ逃げこむことで、心の傷を癒すより、今は方法がない。そして、さらに、それは、その家庭の生活が私一身にかかっていることで、私はまた世間へ醜態をさらさなければならなかった」

と「追放者」の一文で述べ懐したとおり、甘さを曝け出してもいるが、私はむしろ誠実をそこに見たい。光太郎も葦平も、「戦前」を引きずりながら、自分の身のうちに巢喰い凶太く生き残るそれと必死に格闘した。それは他の文学者にみられないことだった。作家としての歩み、戦争中の過ごしよう、戦後の苦闘を総ざらえのように書いて自己の戦争責任を問いつめた『革命前後』の初版発行直前、葦平はみずから命を絶った。一九六〇年一月、五三歳になる前日だった。

葦平の生き方に「器用に転身できない愚直さ」「繊細な詩人の魂」を見たのは、医師の中村哲である。本書「桃太郎」に出てくる葦平の妹秀子と夫中村勉の一子である。アフガニスタンで医療活動にいそしむとともに貧窮からの脱出を願って荒れ地を開削し、水路を通して緑の畑地に変えた男は、葦平の甥であることを生涯誇った。凶弾に倒れたが、初めてのヒンズークシユ山行で見たハンセン病者が頭から離れず、放ってはおけないと志願してアフガニスタンへ向かったのは、葦平がそうだったように、祖父母の玉井金五郎・マンゆずりの「侠客」の血が騒いだからだろう。

ともあれ、苦悩まじりの火野葦平の戦後作品から、葦平自身と身近の還ってきた兵士たちの「戦後」を集めたのが本書である。帰郷したものそこに待つはずの妻はおらず、精神を病んだ男をえ

がいた「無郷者」、戦争で苦闘し手足を失った者たちへの世間の目の冷たさと再生への心組みを捉えた「悲しき兵隊」、末弟の死をめぐる戦時下の狂気と母親の悲しみを見つめる「桃太郎」、さらにビルマの遺骨収集で発見された鉄兜にまつわる将官と兵の親交を切り取った「遺骨の人」、自身の公職追放をふり返り、戦前・戦後で掌を返す人間の皮相、狡猾をとらえた「追放者」など、思いを沈めずには読めないものばかりである。

「日本鬼子兵」は、一一年ぶりの上海訪問の日を追っている。そこは、「麦と兵隊」「土と兵隊」を書いたところでもある。懐かしさはつのるが、今は軍が駐屯し、戦友は戦犯でとらえられている。葦平は、えがかれているように、戦後、中国に足を運ぶことをためらわなかった。刃が刺さることを承知で、かつての自分と対面しようとした。中国人女性を陵辱・殺害したことを戦後、小説に描いて芥川賞候補にもなった美術評論家は、訪中を何度誘われても拒絶したと聞く。比べて述べることではないが、火野葦平の戦争責任への向き合い方はそのようであつたと付言しておきたい。

さらに申し添えれば、葦平は戦後、鈴木安蔵らの「憲法研究会」に資金援助し、第一回ビキニデー（一九五五年）に参加した。小説では、ビキニ水爆実験に抗議してアメリカに乗り込んでいく姿を「天国遠征」で、問答無用でアメリカに占領、基地化された沖縄の悲劇を「ちぎられた縄」で、えがいている。葦平を除いた戦争責任を追及された二四人、公職追放された六人の誰もしいことだつた。

いずれにしても、戦争を繰り返さぬことが「責任」のありようではある。